

土門 剛



土門 剛 どもん たけし

【プロフィール】
1947年大阪市生まれ。早稲田大学大学院法学研究科中退。農業や農協問題について規制緩和と国際化の視点からの論文を多数執筆している。主な著書に、「農協が倒産する日」(東洋経済新報社)、「穀物メジャー」(共著/家の光協会)、「東京をどうする、日本をどうする」(通産省八幡和男氏と共著/講談社)、「新食糧法で日本のお米はこう変わる」(東洋経済新報社)などがある。大阪府米穀小売商業組合、「明日の米穀店を考える研究会」各委員を歴任。会員制のFAX情報誌も発行している。

アゲインストの風が吹く

注目の新潟コシヒカリB.L.がマーケットにデビューした。初上場となった7全国米穀取引・価格形成センターの第3回入札(9月22日)の数字は、コシB.L.に決して「ウエルカム」という数字ではなかった。

第3回入札は、北陸地方のコシが相次いで上場され、新潟一般コシについた値は1俵(60kg玄米)1万8千300円。昨年の第3回入札(9月28日)より400円安い。デビュー

戦に万全で臨んだ全農新潟県本部は、地元・新潟日報に「期待外れの結果で驚いている」とコメントした。

「(卸各社は)収量が確保される見込だから、急いで買う必要がないということなのだろうが、(卸各社が入札を控えた)理由がよくわからない。秋の始めなのでもう少し落札されてもいいはずで残念」(9月23日付け)

その中で、コシ産地の新米作戦も各産地各様だった。コシを生み出した福井コシは、新潟がコシB.L.への一斉切り替えを強行したのを意識し

てか「大勝負」をかけてきた。昨年同入札に比べ、倍の入札販売数量で勝負に出た。が、たった4割の落札率で、大惨敗を喫してしまった。

1万6千円は参考価格となった。

第4回入札(10月3日と4日)でデビューした福島・会津コシもアテが外れた格好だ。新潟コシにとつて最大のライバルだけに、その動向が注目されたが、49%の落札率で空振り。値段も昨年産の同期入札よりも600円安かった。

堅実路線だったのは富山コシ。新米で売りさばくことを目標に掲げ、入札販売数量は昨年同入札比で50%増。1万6千200円で昨年同回比500円安だったが、9割近い落札率。豊作による供給過剰と消費低迷の中にあつてはまずまずの結果と言える。

センター価格はひとつの指標にすぎない。より実勢に近い自由米相場をチェックすると、10月初旬の新潟コシの相場は検査ものでセンター価格より500円安。デビュー当初は換金で処分を急ぐ業者筋の売りが先行したか見え、10月中旬に差しかかると、軟弱気味だった相場は「下げ止まった感じ」(業界誌記者)

コシB.L.初デビュー 食味評価に揺らぐマーケット

土門剛の切抜帳

1 集落営農対象で農協救済

2007年度に創設する品目横断的な経営安定対策(日本型直接支払い)のイメージが明らかになってきた。農水省がリリースした情報を10月17日付け日本農業新聞がストレートに伝えている。内容からして農協界の反応を探るのが目的のようだ。

ポイントが、支払い対象とする「担い手」の規模要件だ。

米の担い手経営安定対策(担経)と同水準にする案を軸に、与党と本格調整に入る。集落営農組織の扱いについても、転作などの作業受託組織が経費や販売収入の経理を一元化するなどの条件を備えていれば対象とする方向で、与党と調整する。

担経の面積要件は都府県の個別経営で4ha、北海道で10ha、集落営農組織で20ha。農水省は新たな制度の要件として、担経の基準より下げれば、農家に規模拡大を促すには弱いこと、一方で、現実離れをした高い数値では農家の意欲をそぎ、逆に改革が後退する恐れがあることを考慮し、担経を軸にした調整に臨む。

かりに都府県で4ha以上となれば、零細規模農家が母体の農協組織は瞬時に瓦解してしまう。そこで救済措置として、20ha以上の集落営農組織も一定の条件の下に直接支払いの対象にしたのだ。集落営農組織を農協がコントロールすれば影響を最小限に抑えられるということだ。

という展開だ。

入札結果の数字から新潟コシB Lの評価を下すにはまだまだ早い。しかし樂觀もできない。コシB Lに対するマーケットの空気は実に冷めたものがある。某大手卸の仕入れ担当者は、「新米を3回ほど試食したが、あれはコシではない。明らかに別の米だ」と手厳しい。そう言いつつも各卸はコシB Lをあてにしている。新潟コシが品揃えに欠かせないアイテムとなっていて、卸には、B Lであるとなかろうと、仕入れなければならぬ流通上の事情があるからだ。

相場を左右するプロの舌

コシB Lの試食評を紹介しておきたい。新潟コシの産地でも、コシB Lの食味については否定的なものが多かった。米業界のWEBには魚沼地区の生産者のコメントが出ていた。

「B Lへの一斉更新には当初から反対していました。十日町農協も当初B Lには反対で、十日町農協単独でも今までのコシヒカリを栽培し続けることを選択しようとしていたそうです。しかし、県からかなりの圧力がかかったんでしょね。十日町農協の抵抗で一斉切り替えは一年遅れましたが、結果的には2005年産から踏み切ることになりました。今

さら北朝鮮でもあるまいし、作りたてのコメを作ることができないなんて、日本は民主国家じゃないのかと疑問に思いました。

私は今年初めてB Lを栽培しましたが、実は仲間が3年前から試作に関わっています。昨年末に「とにかくまずいから食べてみる」とB Lを持ってきてくれました。いつもの炊き方で釜のふたを開けたとたん、嫁さんは「これダメだよ」と一言。うちの嫁さんは警察犬にしてみいらい鼻が利きます。B Lはまったくコシヒカリの香りがしないとあっております。そしてさかのぼること3年前から、県の取り組みで何回か食味調査の食べ比べも行われましたが、そのたびに「おいしくない」と感じたのですが、アンケートの結果はなぜかほぼ互角？ 農協が2年前に行った食べ比べでは、『雪の精』よりもよかったです。とにかく冷めたら食べ比べてみてください。

そして今年栽培してみても気が付いた欠点。99%コシヒカリとはいえず、他の品種が混じっているんですね。穂が揃わないんですよ。出穂期から異変に気付く農家が多かったようですね。今までの『元祖』コシヒカリのような穂揃いではなく、揃うまでに時間がかかるんですよ。そして何より穂丈が揃わない。だから実が入

ってから転んだはずなのに、丈の短はまだ青い穂が残っている、今までは考えられない状態です。その田んぼのコメはクズが大変多く出ました。今後気候によっては大変なことになるかもしれません。『B L』をマーケットはどう判断するのでしょうか。

従来コシとコシB Lの食味差は、プロならすぐに判別できても、素人には少し難しいかもしれない。それでも条件を整えて試食すれば、新潟コシを食べ慣れない人でも、従来コシに軍配を上げるだろう。

その「微妙な差」がすぐにわかるのはコメのプロ。新潟コシを売り物にしている料理屋とか、おにぎりショップなどである。新米デビュー直後に東京の料理屋にコシB Lを送った魚沼の生産者が、さもありませんと思わせるようなレポートを送ってきた。

「米粒もキレイだし、B Lでいいだろう」と思い、コシB Lの『魚沼コシヒカリ』を出荷したところ、『例年のコメとは違うね……』とクレームを受けてしまった。

筆者の見解はこうだ。コシB Lと従来コシとの食味差に気が付くのは産地で8割、都会で1割か。産地は従来コシを食べ続けてきたので違いにすぐに気が付くが、都会では新潟コシを食べるのは少数で食味差をなかなかつかめない。怖いのはその

2 担い手対策は借地入りクルート作戦か

行政主導の担い手確保策はピンと外れだ。そう思われたのが、10月7日付け全国農業新聞が伝えた「担い手の確保必要環境は整った」と題する記事。

全国担い手育成総合支援協議会（会長＝大田豊秋全国農業会議所会長）が、この10月から3月までの半年間を05年度後期の担い手育成・確保強調月間に設定し、農業団体と行政が一体となった推進運動を本格的に展開すると報じた。

同協議会では、農繁期を控えた5〜7月を前期の強調月間とし、特に地域（市町村）段階での認定農業者などに誘導すべき農業者の洗い出しに重点を置いた。担い手確保の力ギを握る新たな経営安定対策の骨格が明らかとなるこの秋を前に、担い手の増加基調を明確にするためだ。

これを受け、青森県農業会議では農業委員1人が認定農業者1人を確保する運動を6月に決め、8月末までの取り組みですでに10人を確保した市町村もできている。農業委員が地域の担い手を明確にすることの重要性が形になったもので、効果的な取り組みとして大いに参考したい。

ここで「効果的な取り組み」とある青森県は、借地料の高いことで知られている。水田10aで4万円もするという。

高い地代を放置しておきながら、このような対策で担い手がどうして育つだろうか。地主団体の同協議会ならでは、高い借地料でも文句を言わない担い手クルート作戦とみた。こんな運動の前になぜ遊休農地が増え続けるのかを真剣に考えてみるべきだ。

1割のプロダ。何よりもこだわり系の米屋や新潟コシを看板にした料理屋のプロには、「コメの味などはわかない」はずはないのだ。その1割の食味評価が燎原の火のごとくマーケットに拡がっていくのである。

先に結論ありきの県データ

新潟県は、従来コシの種籾を研究用以外にはすべて処分したそうだが、あえて退路を断ってコシBLにかけた不転の決意は、もはや漫画チックとしか言いようがない。責任も取らぬ役人が、「このコメ作れ」と号令を下し、それに唯諾々と従った新潟県のコメ生産者は、魚沼の生産者が評したように「北朝鮮」現象である。

しかも「詐欺的」手法でコシBLの作付けを強要していた。その証拠のひとつを示しておこう。新潟県が実施した「コシヒカリ新潟BLの現地適応性」なる調査資料である。このデータをもって、新潟県はコシBLを従来コシと「食味は同等」とし、表示を「コシヒカリ」とした重要なものである。農業のプロである本誌読者が、一

辛 士 門

読すれば、その「欺瞞性」はすぐおわかりだろう。05年産は1号から4号までの4種類

を混植させた。その4種類の数字をチエックしてみよう。

出穂期は、1号から4号までは、判で押したように8月4日、成熟期も9月13日。稈長は、2号の93cmを除いてすべて91cm。穂長も、2号の18・4cmを除いてすべて18・1cm。まるで工業製品のようにピタッと数字が揃っている。BL一斉更新を前提に試験場が辻褄を合わせたような数字としか思えない。

魚沼の生産者は「出穂期から異変に気付く農家が多かった」とレポートしていた。その原因は、天候によるものがあるが、新潟の場合は4種類のコシBLを混植させたことが重ね合わさってパラツキを大きくしたのではなからうか。

年明けには、コシBLに対する評価がほぼ定まる。プロ筋で「まずい」の食味評価が拡がり、従来コシに作付け変更する生産者も増えてくる。05年産は83%あったコシBLの作付け比率は、70%台になり、数年後には60%台に落ちていく。そのうち農協ごと「コシBL返上」という動きも起きてくるだろう。

新潟県が一斉切り替えたコシBL。思わぬ効果は、マーケットが産地ブランドとは関係なく、食味評価を基準にコメの値段を決める時代を呼び寄せたことではなからうか。

「コシヒカリ新潟BL1～8号」の現地適応性

形質	標準コシヒカリ	コシヒカリ新潟BL1号	コシヒカリ新潟BL2号	コシヒカリ新潟BL3号	コシヒカリ新潟BL4号	コシヒカリ新潟BL5号	コシヒカリ新潟BL6号
出穂期	8月4日(8月5日)	8月4日	8月4日	8月4日	8月4日	8月5日	8月4日
成熟期	9月13日(9月15日)	9月13日	9月13日	9月13日	9月13日	9月14日	9月14日
稈長	91(91)cm	91cm	93cm	91cm	91cm	91cm	89cm
穂長	18.1(18.4)cm	18.1cm	18.4cm	18.1cm	18.0cm	17.6cm	18.7cm
穂数(本/m ²)	411(422)	421	399	411	398	412	434

標準コシヒカリのカッコ内は「コシヒカリ新潟BL5～6」の対照値

3 農協が先か？ 農家が先か？

インターネットの「2チャンネル」をご存知だろうか。電子掲示板のことだが、大手のメディアではアンタッチャブルなことがいろいろと書いてある。

ときには、特定の個人を名指しで批判する名誉毀損まがいのこともあるが、社会の裏の仕組みや本音を知るには便利なサイトでもある。

実は、農協問題もよく取り上げられていて、農協職員が投稿主となっていることもある。最近、目に付いたのは「農協職員にも言い分がある」という書き込み。

農協があるからこそ、農家の人が助かっている部分って多いと思う。燃料代、資材代なんてある時払いでいいし、電話1本で持ってきてくれる。1年余りも燃料代をため込んでる人なんてサラです。他の民間の会社ならとくに怖いお兄さんが督促に来てもおかしくない状態なのに、農協なら待っててくれる。融資だって受けることができるし、サラリーマンなら通じない常識が農協なら通じてしまう。農家の人は、農協をなんだかんた言うことはできないと思いますよ。まあ農協側も無理な共済や生活資材などの売り付けをしますけどね…

かなりリアルな表現だ。書いてあることはすべて事実だ。ある意味では両者、持ちつ持たれつの関係が続けてきた。

一般社会の常識が通用せぬ組織に誰がしたかは、卵が先か、ニワトリが先かのような議論だが、両者の甘えの構造だけがくつきりと浮かび上がっている。